

両足尊

永遠輪廻

我等は生死の海底に限りなき苦悩をつづけています。たとえ我等の世界に相対的な自由や開放や便利や満足が与えられても、第一義の意味において、大地は永遠に苦悩そのものであります。釈尊が説かれた「苦諦」の文字や、親鸞聖人によって叫ばれた「生死の苦海ほとりなし」の宣言わ、悲しいことながら、現在までに、私の前で如何なる社会学者も哲学者も一人だつて壊してくれた人はありませんでした。

「何！ 力と頼んだ子供が急死して人生が暗くなつた……………。何！ 病氣して体が片輪になつて人生が暗い……………。何！ 生れつき頭が悪くて勉強が出来ないので人生の落伍者になつて泣いている！ そんなことは個人問題だ。社会の大局の問題じゃない。その人だけの問題だよ。だいたい社会の苦は富の生産関係及びその分配関係等によつて左右されるんだよ。だからその土台の問題を棄てておいて個人問題などにかかわつていのが認識不足というものだ。」

富の問題の解決、社会組織の改造、それによつて我等の世界に相対的自由や開放の生れることを信じます。そしてそれは人類のなさねばならぬ重要な歴史的問題であります。しかし我等はこれによつて第一義的な問題に解決を満足するまで与えられることが出来るでありましょうか。永劫の苦海である大地にそれだけで満足するのでしょうか。不具になつたり、子に死なれて人生が味気なくなつたり、頭が悪くて名譽欲の満足が出来なかつたりする、そうしたことは個人問題にちがいない。しかしその個人問題が形こそ違え、万人に背負わされ、与えられているのではありますまいか。

私どもはかれんな人間の生活の営みの中に、永劫輪廻の相殺の悲劇や、地獄の相や餓鬼や畜生の相を見ないではいられませぬ。闘尊はさけられませぬ。しかしそれは痛ましい非理想的な事実であることに変わりはありません。「皆永劫輪廻の苦海の事実なのだ！」、その仏陀の大悲のみ言葉を味わないではいられません。一個の苦悩が万人を代表し、一個人の罪悪が万人に通じ、一人の煩悶が世界を象徴することを思った時、我等は簡単にかたづけることができません。耳をかたむけ心をよせて一切人の苦悩に同感する時、我等は何を求め、何を願い、何を欲するかを知らされます。そこに我等は「生命の絶対自由意志」の叫びと求めとを知る者であります。

先日もその昔親しかった私と同年輩の人の、自動車との衝突致死の報に接しました。たつた十一月にはこの次にお出でを待っていますと言われた方の死の知らせを受けました。そして河内駅での汽車転覆のあの悲惨事が天下の耳目を震憾せしめました。

「死！」は我等のあらゆる営みに「無価値」の宣言を与えます。我等は「死なんて当然だよ。そんなことが俺たちの問題たり得るか。」といい得らるる英雄？とはあまりに遠くへだたつて、深い関心を諸行無常の上に持たざるを得ないのであります。

けれども亦、死するが故に人生の営みは全て虚無だといつて懐疑の中に自殺するには、あまりに深い魂の願いの声を聞きはじめました。

我等はこの第一義の大問題に対して、明確な断定と、衷心の満足と、生の勝利と、ゆるぎなき安心と、血税を支払って生きるに足る価値の認識と、苦悩を超克する力とを与えられなければなりません。而して宗教が人類の本能的要求であったのは、こうした生命の願いのためでないではありません。

如来が何であるかを考える前に、私は人間の宗教心について考えなければなりません。

昨年六月、私は大阪市に行つて約半ヶ月を暮しました。そうして大阪人の様々な様子を見聞しました。一日、人を待つために浄正橋の停留所に立っています一時間の間に、その側にある真言寺の境内に足を入れました。するとその本堂の前にある地藏尊やお大師の祭つてある前に、来るは来るは、老人といわず、若者といわず、男といはず、女といわず、様々な階級の人たちが入れ替わりたちかわり、来ては小さい蠟燭をたくさん立てて、呪文をと覚えては拜んでゆきます。何か様々な願いがあることなのでしょう。あのにぎやかな千日前の寺でも多くの人たちが集つて現世祈祷のために祈つたりお籤をひいたり、大繁昌であります。

天理教、金光教、何々教、全て大繁昌であります。家を変える時には方角を見てもらい、悪い方角に立つて行くためには封じの祈祷をしてもらいます。病氣平癒、家運隆盛のためには様々な神や仏をかつぎ出します。方角の善悪、日柄の吉凶、それを知らない者を愚者だとされてあります。台所をのぞけば大抵の家にカマドの神様が祭つてあります。こうした迷信に投ずるためには、新聞が運勢判断をのせます。驚いたのは私の買った博文館の当用日記すら、民間信仰吉凶暦をのせています。果して人間は、一白水星二黒土星三碧木星……………八白土星九紫火星と九通りのホシで運命が定まるのでしょうか。

我等はかかる考え方や信念を一言にして迷信だといいます。人間はかくまでも迷信なくしては生きられないのでしょうか。

然れば何故にかくの如く文明の極度にまで開発した都会に、迷信がかくまでは生れるのでしょうか。

私は先ず「教育のないため」と第一の理由をあげないではいられません。人は教育を受けない限り、いくら都会に住んでいたつて、何時までも無智のままです。百万二百万と集つてただ毎日奮闘している人たちには、村落や町や、小都市に比較して教養を受ける機会が極めて少ないのであります。田舎では寺院の説教や種々なる教育機関、会合の機会等がありますが、大都会にはそれがないといつてよい。もし出席するとしてもそれはごく少数の篤志家であります。

導かれぬ大衆たちは、勝手に神や仏の靈験あらたかなりと聞くにまかせて、稲荷にお大師に観音様に馳せ集つて銘々の願いを満足しようとしています。

迷信は、水気のある所に草がはえ、栄養のある所、そこにバクテリアが発生するように、人間苦のある所、そこに必ず発生します。そしてそれはこれを滅そうとしても決して滅ぶものではないのであります。如何に説明してもただ漫然とそう思いこまれるのであつて、如何なる努力も無効であります。然ればどうするか。それはただ教養によつて正し、小信念にまで純化することより外にはあり得ません。

釈尊は独立者であります。天地創造の神、運命の左右神をひき破り、日の吉凶を打ちくだいて「日々これ好日」を提唱し、方角の好悪なきことを断言し、一切の邪神淫祠を打ち崩して、人格本然の上に立ち上って自覚を表明して、自ら仏陀たることを宣言せられました。

釈尊は自らの世界を自ら行歩し、他の何ものにも左右されずに信念のままに自由に独立に道義そのものを潤歩し、久遠の真如法性を生活し、具顕し、一切衆生の上に神通応化して教化救済されたのであります。

大衆経典に神秘不思議なる莊嚴の釈尊を説くのは、全くこの自覚せる生活者を讃嘆し象徴し神秘化したのにすぎません。釈尊こそは、最高の道義を實踐し、最高の理念を体認した完全の人であつたのであります。経典とはその日記であり、語録であり、その自覚せる涅槃の講説であり、象徴であり、詩文であり、歌嘆であり、讃美であります。彼の三十二相八十種好の相好の如きも、完全絶対なる人格の象徴讃美に外なりません。

架空の説話でもなく、独断でもなく、ここに一個の生活者独立者があつた。その釈尊をおいては一切はないのであります。釈尊という地上に生活せる人から如何なる経典も生れたのであります。

我が阿弥陀仏の如きも、釈尊の自覚をおいて外にあるのではありません。阿弥陀仏の中に釈尊を見、釈尊の上に阿弥陀仏をみるのであります。まことに釈尊こそ、はつきりと両足で歩んだ、両足尊であつたのであります。而して仏教史上不朽の地位を持つ龍樹菩薩は十二礼において「阿弥陀仙両足尊」と阿弥陀仏を歌嘆されたのであります。

釈尊と弥陀

私どもは先ず釈尊と阿弥陀仏との関係を親鸞聖人の信海を通して味つておかねばなりません。大無量寿経を拝読する時、我等は先ず、耆闍崛山の会座に來会せる万二千の大衆が「一切大聖、神通已に達せり。」とあるに驚くものであります。権化の方便を説くを要しない、神通すでに達せる大聖であります。しばらくはこの大聖の過去及現在の聖徳の讚美にはじまつています。その大聖の來会に臨める釈尊は光顔ことの外魂々として五徳の瑞相を現わしました。これ即ち仏相念の世界においていわゆる身心共に弥陀三昧の大寂定に入つて永遠の光に輝きたまひしに外なりません。

この三昧に入つて説かれたのが法蔵菩薩の本願でありました。その上巻では全く真如より來生せる法蔵菩薩の因位の大本願をときました。そして下巻ではその成就されたる仏国土に願生すべきことを説きました。

まことに阿弥陀仏は所説であり、釈尊は能説であります。常の釈尊は法を念じ法を説く釈尊であるが、大経においては仏を念じ仏を説きたもう仏であります。

阿弥陀仏はその本願に「至心に信樂して我が国に生れんと欲へ」と誓いました。即ち欲生我国と誓つたのに対して、釈尊は「願生彼国」と説く。一は理想の彼岸に立つ

て欲生我国と一切衆生を召喚し、一は生死の現実に生きて「願生彼国」と発遣し咨嗟します。一つは教主であり、一つは教主であります。

我等は釈尊が大経においては、一切衆生と共に彼国に願生せんとせられる態度を押しつつも、更に釈尊を久遠の本仏の願海に浮べる還相の人として、阿弥陀仏との一体を信ずるものであります。

即ち親鸞聖人は和讃に、

「久遠実成阿弥陀仏 五濁の凡愚をあはれみて

釈迦牟尼仏としめしてぞ 迦耶城には応現する。」

と詠まれました。即ち釈尊は久遠の本仏、阿弥陀それ自身の応現である。一体であることの信念の告白であります。まことに阿弥陀仏なる仏格は釈尊と一ならざる仏格にして、同時に釈尊の先験的仏格であります。浄土教が後世限りなき発展をとげて、地に生滅する応現の釈尊を廃立して、超えてその根本仏格たる阿弥陀仏に帰命して本尊の聖壇に拝んだのは、釈尊を捨てたのでなくて、これを超えて、限りなく釈尊と等しく、彼の仏と一体の大海に帰入して、人格の絶対開放、絶対独立の道義に永遠に生きんがためであります。